

私立 東京女子大学

プログラムの名称：マイライフ・マイライブラリー

-- 学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム

プログラム担当者：図書館長 小林 一章

キーワード

1. マイライフ支援 2. マイライブラリー 3. 女性のキャリア構築力
4. 学生協働サポート体制 5. 学習支援

1. 大学の概要

東京女子大学は、1918（大正7）年の創立以来、一個の自立した人間としての生き方を模索し、男女共同参画社会の実現に寄与し、高度の社会貢献を行い得る女性を育成することを目標としてきた。具体的には、新しい時代を見据えつつ、冷静な洞察力と判断力を兼ね備えた女性、社会の中で責任ある行動をとり、他者との違いを受容し、日本及び世界に貢献できる女性を育成することを目指すものである。

本学の特色であるキリスト教の精神に立脚したリベラル・アーツ教育は、「専門性を持った教養人」の育成を重視し、文理学部7学科（哲学、日本文学、英米文学、史学、社会、心理、数理）、現代文化学部3学科（コミュニケーション、地域文化、言語文化）のどの学科も少人数編成により専門領域の学問的方法を学ぶと同時に、他の学問領域の視角や方法を学ぶことを通して、知性ある判断力、自立できる精神力を持った女性を社会に送り出している。

学生数：約4,200人

設置学部：文理学部・現代文化学部

（大学院：文学研究科・現代文化研究科・
人間科学研究科・理学研究科）

2. 本プログラムの概要

本取組は、図書館を、学生一人ひとりの潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援）活気に満ちた知的探求活動の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援のために学生アシスタントを積極的に活用する学生協働サポート体制を整備する。学生はそれぞれのニーズに応じて、図書館内学習支援の利用、図書館以外の学内諸部署と連携して企画される各種の研修・セミナー等への参加、学生アシスタントからの助言等を選択できる。

これら多様なサービスを利用することで、思考力、行動力、コミュニケーション力を養い、社会人基礎力を身に付けることができ、本学が目指す女性のキャリア構築力の育成につながる。また、「支援される立場」から学生アシスタントとして「支援する立場」へとステップアップしていく可能性も期待でき、学生相互の自発的交流を通して、つながり合い、啓発し合い、社会人としての資質をも高めることを目指す。

3. 本プログラムの趣旨・目的

（1）取組の背景

東京女子大学では、建学の精神に基づいて大学内の各機関で丁寧な教育・学生指導を行っている。しかし、学生の側から見た場合、それぞれのサービス間の体系が分かりにくいという状況がある。自ら積極的に行動できる学生は、大学から提供されるサービス内容に活躍の場を見出し、自分でステップアップしている。

しかし一方で、高校から大学の学習・環境の転換に適應できなかった学生は、学習の目的を見出せず、大学在学中に自分の中に眠る可能性を発掘することなく過ごしてしまうことがある。結果として、社会との結び付きを築けないでいる学生も少なくない。

（2）「マイライフ・マイライブラリー」の大学にとっての意義

本取組は、図書館を、一人ひとりの学生の潜在的な生きる力を引き出し（＝マイライフ支援）活気に満ちた探求活動の拠点となる「滞在型図書館」＝「マイライブラリー」に発展させ、学習支援として学生協働サポート体制を整備するものである。取組の内容は以下の通りである。（i）図書館を改修し、新たなフロア構成により多様な学生のニーズに応える。（ii）学生協働サポート体制による図書館内学習支援を実施する。（iii）図書館において基礎的日本語能力養成のための初年次

事例34 東京女子大学

学習支援を行う。(iv) 他部署との連携を強化する。

これらの取組を通し、積極的な学生は、整備された学術情報や学内の企画、他の学生への支援を通してさらに成長することが期待されるとともに、学習の目的が見定められない学生には、正課教育と正課外教育両方のサービスと情報の提供により、成長への種をまき、自分の力で一步踏み出すまで、長期的な展望のもとに支援していくことが可能となる。

(i) 新たなフロア構成により、多様な学生のニーズに応える

多様化する学生のニーズに応えた多様な空間を用意する必要がある。「活発な交流の場」と「静謐な環境」、「学習」と「くつろぎ」の度合いが異なる複数の空間から、学生が自分の学習目的に合わせて、選んで利用できるようにする(図1)。

リフレッシュルーム

教室、図書館での学習の合間に一息つく場。

コミュニケーション・オープンスペース

自由に意見を交換し、集団学習を行うスペース。無

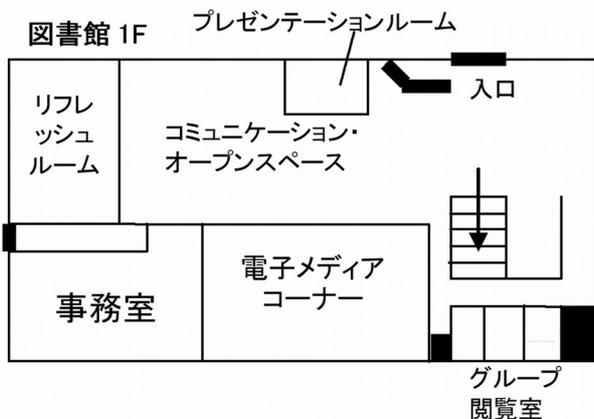


図1 図書館1階改修後レイアウト図

線LANを設置し、ノート型PCの貸出を行う。

グループ閲覧室

外からの音を遮断できる学生コミュニティの場。

プレゼンテーションルーム

外からの視線に慣れる効果も狙ったガラス張りのプレゼンテーション用の部屋。

電子メディアコーナー

ThinClientサーバシステムとDVDサーバシステムの導入及び約50台の端末設置により、インターネットや図書館で購入しているデータベースによる学術情報収集、論文やプレゼンテーション資料の作成・提出までが可能となる。

個室(2F)

学習や研究に、一人で集中できるスペース。

(ii) 図書館内学習支援体制

学生協働サポート体制を導入する(図2)。この制度の特徴は、上級生を学生アシスタントとして積極的に活用することである。学生アシスタントには、以下のa~dまであり、質問する学生は自分の目的に応じてアシスタントを選ぶことができる。「ボランティア・スタッフ」の業務は、図書館の利用方法の案内等、比較的簡単な業務である。チャレンジしやすいモデルを設定することにより、自分に自信が持てない学生のやる気を喚起し、一歩前に踏み出させることを目的としている。役割を与えられ、他人から感謝されることの喜びを知ることで自信を持ち、もうワンランク上の「サポーター」へ、さらには「システム・サポーター」、「学習コンシェルジェ」へステップアップしていくという一連の形がロールモデルとなることを期待している。

さらにアシスタントを担当する者は、質問者に対し、アシスタント同士で連携を取り合い、相手の希望を尊

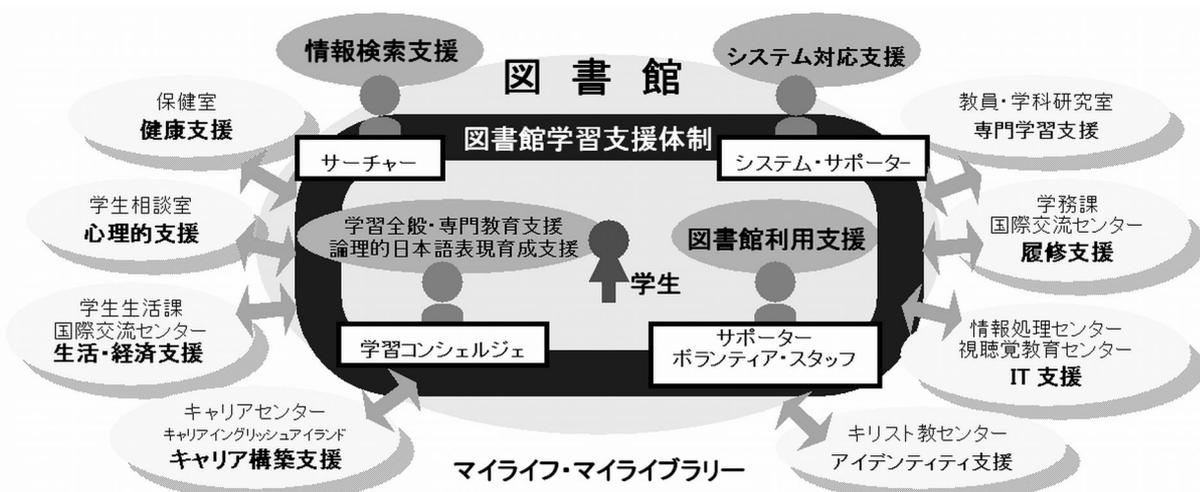


図2 図書館内学習支援体制

重した助言を行う。このような学生が学生を支援する相互協力を基本とすることで、支援する側、支援される側双方が人間的に成長することを目指している。

ボランティア・スタッフ 図書館利用支援

一般学生の自薦による。自分の都合に合わせ図書館を利用する傍ら、他の学生の求めに応じ質問に答える。目印となる統一の服装をすることで他の利用者にアピールする。図書館の利用方法について研修を受ける。

サポーター 図書館利用支援・書架整備

一般学生の自薦による。書架整備・配本などの業務が与えられ、指定した時間に勤務する傍ら、他の学生からの質問に答える。目印となる統一の服装をすることで他の利用者にアピールする。図書館の利用方法について研修を受ける。

システム・サポーター システム対応支援

一般学生の自薦による。台数の増えた端末の操作、障害に対応する。数理学科やコミュニケーション学科の学生の活躍が期待できる。

学習コンシェルジェ 論理的日本語表現育成支援・学習全般・専門教育支援

大学院の学生を登用し、専用デスクで、論理的で筋道の通った文章の書き方について助言する。論理的日本語表現育成のため、担当者には外部委託による研修を実施する。また、学習全般についての質問に答える。博士後期課程の学生は、自分の専門分野に該当する質問についても回答するが、専門外の質問に対しては、他の学習コンシェルジェや研究室を紹介し案内する。

サーチャージャー 情報検索支援

情報検索応用能力試験合格者あるいはそれに準じる能力をもつ者を登用。情報検索のプロとして、テクニックを学生に指導する。また、図書館内の情報リテラシー教育を強化するため、その講師を務める（写真）。



写真 情報リテラシー講習

(iii) 図書館における基礎的日本語能力養成のための初年次学習支援

大学での学習を可能にするスタディ・スキルと、大学生活の基本となるスチューデント・スキルの習得にとって、文章の表現力は欠かせない要素の一つであるが、独立行政法人メディア教育開発センターの小野博教授らの「大学生の『日本語力』レベル調査結果」（図3）で、大学生の「日本語力」が低下しているとの結果が出ている。

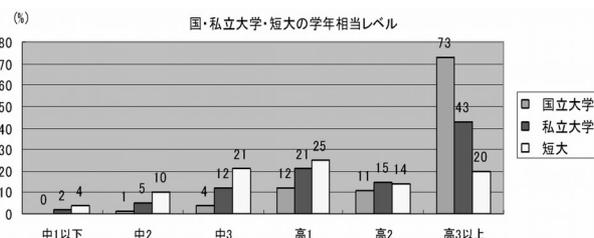


図3 独立行政法人メディア教育開発センター 小野博教授らによる
（産経新聞2004年11月24日より）

本学では、全学共通カリキュラムに、論理的な文章を書く方法を身に付けることを目指す「文章表現法」を設置しているが、近年上記調査結果と同様の傾向が見られる。そのため、主に新入生の希望者を対象に基礎的日本語能力を養成する学習支援を、図書館で実施する。この支援を正規授業の補習的プログラムとして位置付け、高校からの「円滑な移行」を図り、大学での学習への転換をサポートする。このプログラムは、「文章表現法」履修者以外の学生も対象とし、各学科が行う初年次導入教育との相乗効果を図るものである。これにより、早い段階で、学生に入学して良かったという感情や大学生活への期待などを喚起させ、これからの学習・学生生活に意欲を持って取り組む契機とする。このほか「日本語ジム」という携帯電話を利用した漢字・熟語・ことわざ習得用ソフトやコンピュータースキルアップソフト等を用意するほか、ホームページにデータベース利用促進のためのナビゲーションページを置き、自習できるようにする。

(iv) 他部署との連携

キャリア・センターの「自己PR研修・4年次学生による就職報告会」等をプレゼンテーションルームで実施し、就職への効果を計るためのインターネット就職試験対策「E Testing」を導入する。さらに、キリスト教センターが毎年行っている心身障害者施設などへのボランティア活動の報告や発表会をリフレッシュルームで開催する。

このほかにも様々な学内外の企画と連携することで、

事例34 東京女子大学

学習や研究のために訪れる学生とのリンク、学生アシスタントの新たな目標設定の場として、図書館が機能する。これにより、本学の教育目標である女性のキャリア構築にも資する。

さらに、図書館の入口には電子掲示板を置き、正課教育関連だけでなく、大学主催の企画から学生の自主的な正課外活動も含めた様々な情報まで発信することで、学生自らが新たな関心の対象を発見し、主体的に取り組めるようサポートする。

4. 本プログラムの独自性（工夫されている内容）

「マイライフ・マイライブラリー」の最大の特徴は、学生一人ひとりのペースを尊重しながら、大学が支援を通して学生の成長を見守り、応援する点にある。大学の使命として、必要な時期に必要なサービスの提供は行う。しかし、あくまでも主体は学生にあり、大学が果たしたくさんの種がいつ芽を出すのか、それを決めるのは学生本人である。自信が持てない、大学で学習の目的を発見できない学生は、学生アシスタントとのコミュニケーションを通して大学各機関の支援を受けながら、自分の可能性を探していく。こうした学生同士の相互協力が質問者と学生アシスタントの双方を成長させる。

学生を活用したアシスタント制度を発足させている

大学は多い。しかし、学生が他の学生の手本となって成長を促す体系、人間力と知力双方に働きかけていること、この2点を体制として確立する学生協働サポート体制は本学独自のものである。また、大学の知の集積である図書館でこのようなサービス体制を敷く点も他大学の参考になると思われる。

5. 本プログラムの有効性（効果）

以下のような現在の取組に、新たに「マイライフ・マイライブラリー」の取組を付加することにより、(1)～(3)のような様々な効果が期待できる(図4)。

〔現在の取組〕

- ・ 新入生オリエンテーション
- ・ 学習支援：アドバイザー制度、図書館学習ガイダンス、東京女子大学学会による学生研究奨励費制度等
- ・ 生活支援：学生相談、奨学金等経済支援、アルバイト紹介、サークル活動・ボランティア活動支援、外国人留学生への支援、障害のある学生への支援等
- ・ キャリア構築支援

(1) 大学への早期適応と教育活動との連繫

「対人関係での適応」と「学習面での適応」には高い相関関係があると考えられる。初年次学習支援を実施することで、「集団学習を通じた対人関係での適応」と、

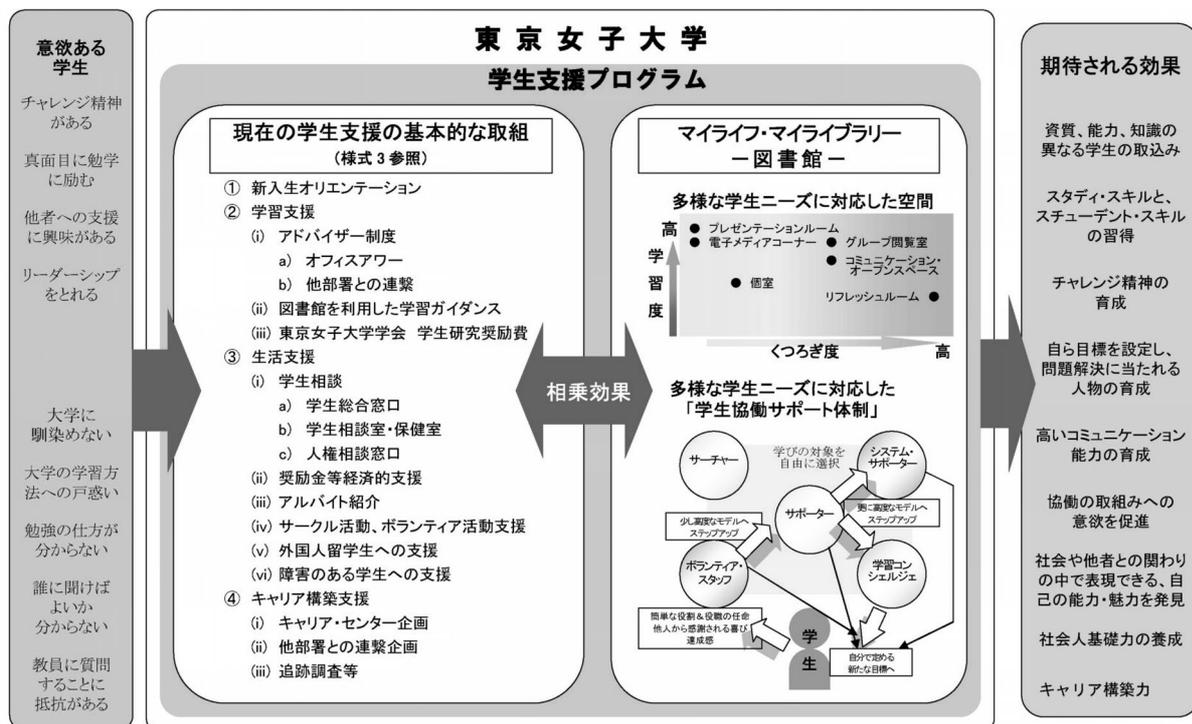


図4 本プログラムの有効性

「学科が実施する導入教育と合わせた学習面での適応」が見込まれる。入学時の早期からこの2つの支援を行うことにより、その後の学生生活において、持続性の高い適応が可能になると考える。

(2) 社会的ニーズに対応するための社会人基礎力及びキャリア構築力の育成

学生支援のモデルとして「ボランティア・スタッフ」は、「自由な時間帯で簡単な業務を」という、一歩踏み出しやすいポジションを提示するために置いた。自分の手に負えない質問を受けても、他のアシスタントが所定の場所におり、引き継げる体制になっている。失敗しても互いがカバーしやすく、粘り強く取り組める効果を期待している。

質問をする学生は、自分で何が分からないのかが明確でないことが多い。ボランティア・スタッフ、サポーター、システム・サポーター、学習コンシェルジェは質問に対してそれぞれの業務の立場で解決策を探り、相互に連携し合い、チームワークで協働しながら問題解決に当たる。それにより対人コミュニケーション能力を身に付けていくとともに、定期的に交流会を開き、情報を共有し親睦を図っていくことで、「より良い人間関係」と社会人基礎力を習得し、さらに判断力、決断力等をも備えたキャリア構築力の育成が期待できる。

(3) 現在の学生支援との連携と、様々な体験への参加促進

なぞるべき体験がなくては自分の言葉を紡ぐことは難しく、思考力の向上も期待できない。「学生アシスタント」への参加のみならず、学生は大学が提供するプランを電子掲示板で知り、また、前述したキャリア・センターやキリスト教センターの企画をはじめとして、現在の学生支援の取組や講演会などが頻繁に図書館で繰り広げられることで、学生の興味は自然とそれらに向いていく。

たくさんの選択肢の中から学生は自分にあったものを見つけ、参加する。それが貴重な体験となり成長へと結び付く。また、情報の集中により、学生のニーズの把握が容易になり、ニーズへの対応の広がりが期待できる。

6. 本プログラムの改善・評価

(1) 評価体制・方法

本学の建学の精神・教育目標に基づき、自己点検・

評価委員会が、全学的見地から点検・評価を行い、改善すべき点があれば指摘し、適切な方向付けを行う。

(2) 評価の観点

取組の中で導入したプログラムや、図書館が以前から行っていたサービスの利用率の変化や、教員から見てレポートや論文に変化があるか、図書館内学習支援に参加した学生の中に学びの要素がどの程度あったかなどの観点から評価する。

具体的には以下の通りの評価を行う。

- ・インターネット就職試験対策「E Testing」の利用者数調査
- ・自習プログラムの利用数
- ・基礎的日本語能力養成プログラムの参加者数
- ・新たな取組導入後の、入館者数、購読データベースの利用数、ガイダンス受講者数
- ・GP最終年度に実施する教員の学生に対する意識調査アンケート
- ・各アシスタントに行うアンケート
- ・現在の基本的な取組との連動・連携が機能したか、関係部署への聞き取りを行う。

(3) 評価の活用について

(2)の観点による評価結果を検証するとともに、学習支援体制の改善及び各部署との連動・連携の有効性を検証し、翌年以降の学習支援体制に反映させる。

7. 本プログラムの実施計画・将来性

(1) 年度ごとの運用について

初年度：図書館内学習支援体制（ボランティア・スタッフ、サポーター、システム・サポーター、サーチャー）発足、「E Testing」導入、「日本語ジム」導入。

2008（平成20）年度：図書館内学習支援体制（学習コンシェルジェ）発足、初年次学習支援プログラムスタート、正課教育と図書館利用との連携のため「WebClass」導入、図書館改修工実施。

2009（平成21）年度、2010（平成22）年度：検証の上、さらなる効果を目指す。

(2) 組織性の確保

図書館内学習支援体制は、「図書館委員会」の下部組織「マイライフ・マイライブラリー運営委員会」の中で運用規則を決め運営していく。全学的な連動・連携は、学長のリーダーシップの下に学長室会より示され

事例34 東京女子大学

る方針を、必要に応じ所轄機関あるいは教授会で協議の上決定していく。

(3) 人的・物的・財政的条件の確保

今回の取組を可能にするための図書館の改修工事については、財政的条件の確保がすでになされている。人的な条件については、今後、図書館課員が必要な研修を受けるとともに、経費補助期間中に、学生アシスタントの養成システムを整えることができると考えている。

(4) 経費補助期間終了後の展開、評価体制・方法・指標の設定及び当該評価の将来的反映

(i) 経費補助期間終了後の展開

本取組は、経費補助期間終了後も、事業を発展的に継続することを意図している。それには、設備や「初年次学習支援」の方法改善等、新たな予算措置を講ずる必要が生ずる部分もあるが、大学の経常的な事業として継続することができると考えている。さらに、経費補助期間内に、図書館課員の育成、学生の自主的な活動の育成を行うことによって人的な基盤を固めていく。

(ii) 当該評価の将来的反映

6(1)の点検・評価の結果、取組に大きな問題点があれば、大学評議会の下部組織である将来計画推進委員会が、制度の改善等、改革の方針を策定し、教授会に提案する。

選 定 理 由

東京女子大学においては、学生支援に関する目標等に基づき、学生支援の取組を5年以上にわたり、具体的かつ組織的に実施しており、その結果は例えば、平成15年度「特色ある大学教育支援プログラム」、平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」に選定されたことで実証されるように、大きな成果を上げていると言えます。

今回申請のあった取組についても、活字離れが進行し、多くの大学で図書館利用率が減少していると言われる中で、図書館に着目したことのみならず、専門家との連携の下に、学生や大学院生を活用して、学生の図書館利用を支援するという発想に基づく学生支援策は、独自性が認められ、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。さらに、すでに学生支援目的での図書館の改修というハード面の整備が進み、それと連動させた取組になっている点も、取組の連続性が確保されているという点のみならず、本取組の実現性の面でも優れていると言えます。

なお、今回の取組は図書館利用支援を中心とする企画になっており、学修支援面に関しては、まだ工夫・充実の余地が残されているとの印象を受けたので、今以上に組織的・体系的なデザインを持つものへと発展させることで、より他の大学等の参考となるような優れた取組になるものと思われまます。